

ZAGWIJN, W.H. & VEENSTRA, H.J. 1966. A pollen-analytical study of cores from the Outer Silver Pit, North Sea. *Marine Geol.*, 4: 539-551.

(*印をつけたものは直接参照できなかった)

(1988年5月14日受付)

〔書 評〕

Extinction 関連文献

いま生物の extinction (絶滅現象) が非常に注目されている。これは1987年にオタワで開催された第12回国際第四紀研究連合(INQUA)会議で、絶滅現象を扱うセクションを設ける計画があったことからもうかがえる。1980年代に入り ALVAREZ, L.W. らが、白亜紀末期の生物の大量絶滅が小惑星の地球への衝突によって引き起こされたとする説を提唱して以来、その最大の関心事であった恐竜の絶滅はもとより、それ以外の生物の絶滅現象についても多量の論文や著書が書かれるようになった。植物の絶滅現象も恐竜や哺乳類の絶滅現象との関連で盛んに議論されている。ここでは植物の絶滅現象について多少とも触れられている著書を紹介する。

NITECKI, M.H. (ed.) 1984. *Extinctions*. 354 pp. Univ. Chicago Press.

STANLEY, S.M. 1987. *Extinction*. 242 pp. Sci. Am. Press.

これらは地球の歴史における様々な大量絶滅を扱っている。前者は現在進行中のものを含めた新生代の大量絶滅のパターンとその要因の理論的説明が中心になっている。植物については KNOLL, A.H. による *Extinction of vascular plants* でデボン紀、ペルムートリアス紀、後期白亜紀の大量絶滅が詳しく述べられている。後者は一般向けに書かれており、絶滅現象全般を広く理解するのによい。美しいカラーの図や写真が多く、楽しく読める。植物は恐竜の絶滅関連で少し取りあげられているだけである。

MARTIN, P.S. & WRIGHT, H.E., JR. (eds.) 1967. *Pleistocene Extinctions: The Search for a Cause*. 453 pp. Yale Univ. Press.

MARTIN, P.S. & KLEIN R.G. (eds.) 1984. *Quaternary Extinctions: A Prehistoric Revolution*. 892 pp. Univ. Arizona Press.

これらは第四紀の哺乳類の絶滅を中心に書かれているが、植物の絶滅についてそれぞれ一章を設けている。前者の LEOPOLD, E.B. による *Late-Cenozoic patterns of plant extinction* は新生代の植物の絶滅現象の重要な総説である。北半球の植物の絶滅過程をまとめ、地域差を比較検討している。後者は最近の研究成果を網羅した大著で、前者ではあまり取りあげられなかった南半球での絶滅現象もかなり扱われている。全体の量に比べ植物に割かれている分量は少ないが、KERSHAW, A.P. による *Late Cenozoic plant extinctions in Australia* では近年情報が増加したオーストラリアの後期新生代の植物の絶滅現象を概説し、他地域と比較している。

以上紹介した著書はすべて動物中心に書かれている。植物の絶滅現象だけを一冊の本にまとめたものは残念ながらまだない。しかし植物の絶滅についての情報も最近かなり増えてきているので、そのような著書が待ち望まれるところである。

(百原 新)

植物分類, 地理

この学会誌は植物分類地理学会が編集発行しているもので、植物の分類学、地理学、形態学や生態学などの諸分野の論文を中心とした、B5版、1巻およそ200ページの雑誌である。

30周年記念号、50周年記念号等から発足当時のことが偲ばれる。植物分類地理学会は、京都帝国大学理学部植物学教室に植物分類地理学の講座（植物学第三講座）を創設すべく赴任した小泉源一を中心として、大井次三郎、北村四郎、田川基二、竹内敬らの発案によって1932年に発足したものである。当時は、分類学関係の論文を投稿できるところは東京の植物学雑誌か大学の紀要しかなく、また印刷までには多大な待ち時間を要したようである。このような状況をふまえ、小泉らは京都にも雑誌を、と念願し相当な困難を乗り越えて発刊にこぎつけた。雑誌の欧名は、地球の変遷と植物の発展を結び付けて研究しようという小泉の意図により、Acta Phytotaxonomica et Geobotanica と名付けられた。発足当初は無論会員数も少なく大変な苦勞があったようで、会費だけでは発行できず幾人かの篤志家の寄付によって維持していた。小泉は心を痛め、小泉所有の戦前のある号には「ここはつめれば4行減らせる」等とほとんどのページに書き込みがあり、「全体として5ページ減らせる」との結論が表紙に書かれているほどである。戦前、戦中、戦後の苦しい時期を経て、現在では年2回発行が定着し、多くの研究者がこの雑誌から育っていった。昨年は創設者の一人、北村四郎の80歳祝賀記念号を発刊、現在第39巻を発行するに至っている。

しかし、現在では分類学関係論文を掲載する雑誌が充実し、本誌2号に紹介のあった植物地理・分類研究や植物研究雑誌、植物学雑誌、県単位の研究会誌なども発展したため、学界人口との関係から投稿論文が多すぎて発行が追いつかないという状態ではない。そこで最近ではレフェリー制をもうけ、本年からは編集委員会を幹事会とは独立させる体制とした。一方で、現在の学界の状況から判断して、当面、欧文和文半々の体制をとることとしている。

初期のこの雑誌は、日本から東アジア産の植物の分類地理学的報文がおもであったが、小泉自身が興味をもっていたことと読者層を拡大するためにかんがひの古植物学関係の報文が掲載されていた（現在大変少ないのは残念なことである）。“史前帰化植物”など、現在では古くからの用語のように思われているものも、植物分類、地理が初出である。近年は東南アジア関係論文、比較形態学的論文等も増え、日本の分類学界の代表的雑誌として充実している。また、特記しておきたいことは、おそらく日本の分類関係雑誌のなかでは海外と最も広範な雑誌の交換を行っていることで、貴重な分類関係雑誌が多数学会事務局に集められていることである。これは多様性を直接の対象とする分類学にとっては極めて重要なことであろう。逆にいえば、いわゆる Citation Index 誌に引用されるような形ではないが、日本の分類関係雑誌では海外でのサーキュレーションが最もよい雑誌ということになる。

(連絡先：〒606 京都市左京区北白川追分町 京都大学理学部植物学教室内 植物分類地理学会、年会費4500円)

(植田邦彦)